

すでに60才を超えたテナー・サクソ界の大ベテラン、ファラオ・サンダースの音楽には、近年の若手プレイヤーには求めるべくもない賞禄と、堂々たる風格が漂っている。世紀をまたぎ、ジャズ・シーンがますます多彩な展開をみせるようになってきている中において、ファラオの音楽はそんな時の流れをいともたやすく乗り越えて、ゆるぎない確かさで超然とそびえ立っているかのようだ。近年は「セイブ・ザ・チルドレン」のような、ラップやコーラスまで加えた壮大なアフロ・アメリカン・ミュージックを展開して、クラブ・シーンまでも巻き込む人気を得ているファラオ・サンダースだが、その音楽のもつ巨大なスケール感もまた、他のプレイヤーには求めることのできないものだろう。このファラオ・サンダースの新作は、今年（2003年）4月、彼がレギュラー・グループを率いて8年ぶりに日本へやってきた機会をとらえて、東京で吹き込まれた。ヴィーナス・レコードからは、92年

にニューヨークで制作された「愛のパラード」「愛のクレッシェント」という、2枚のファラオのアルバムがリリースされているが、それから10年以上の歳月を経て、ふたたびファラオの作品が制作されたというのも、とても意義あることではないだろうか。というのは近年ファラオ・サンダースの音楽が、かつて見られなかったほどの充実ぶりをみせてきているからである。今回の来日は東京のクラブ“ブルーノート”のステージに出演するため、ファラオ・サンダースはこのクラブで4日間、計8回の演奏ステージをこなしたのだったが、彼は3日目のステージがはじまる前にスタジオへ入って、これらの演奏を録音したのである。その精力的な行動ぶりにも驚かされるものがあるけれども、とにかくいまのファラオ・サンダースは音楽的にもきわめて充実した日々を送っていて、プレイしたくて仕方がないという衝動のようなものが、あらゆる局面で感じられる。“ブルーノート東京”でも、ステージごとにすべて異なるレパートリーを演奏してみせたのだったが、どのステージも表現したいものが溢れかえっているといった感じで、ホットなエネルギーがいっぱいにとぼしるステージに、つめかけた聴衆は圧倒されっぱなしだった。そんなファラオ・サンダースがいま試みようとしているのは、ジョン・コルトレーンの音楽を、改めて今日の彼の解釈で再構築してみようということではないだろうか。あらためて述べるまでもなくファラオ・サンダースは、ジョン・コルトレーンの音楽の強力な影響のもとに、彼自身の音楽を築きあげてきた。フリー・ジャズに傾倒していたファラオは、晩年のコルトレーンのグループにレギュラーとして加わって、その吹奏スタイルだけでなく、音楽に立ち向かってゆく姿勢そのものにまで、はかり知れないほどの示唆を得ている。

しかしジョン・コルトレーンは、67年の夏にその生涯を閉じてしまった。コルトレーンのバンドに加わっての演奏。それはファラオ・サンダースにとって、生涯忘れようにも忘れることのできない、素晴らしい経験であったに違いない。そして以後のファラオ・サンダースは、コルトレーンとの体験をもとに、彼自身の音楽を展開させていったのだったが、それはもちろん今日にあっても変わらない。92年の前述した2枚のアルバムでは、いずれもコルトレーン・ナンバーが中心に演奏されており、コルトレーンのレパートリー演奏することはファラオにとって、とりもなおさず彼の原点を見つめなおすことにほかならない。おそらくファラオ・サンダースは、いっそうの音楽的な成熟期を迎えて、もういちど自身の立つべきスタンスを示してみせたのだろう。今日のファラオ・サンダースは、かつてのようにフリーキーなトーンを連続して吹き続けてゆくようなプレイはおこなわなくなったが、メロディックな中にもアフロ・アメリカンとしての情念をいっばいに表出してゆく彼のプレイは、近年の若手プレイヤーには望むべくもない風

## The Creator Has A Master Planザ・クリエイター・ハズ・ア・マスター・プランPharoah Sanders Quartetファラオ・サンダース・カルテット

- アイ・ウォント・トゥ・トーク・アバウト・ユー****I Want To Talk About You** 〈B. Eckstine〉(7:13)
- ムーン・レイズ****Moon Rays** 〈H. Silver〉(7:19)
- 東京ブルース****Tokyo Blues** 〈P. Sanders〉(13:07)
- グレイテスト・ラブ・オブ・オール****Greatest Love Of All** 〈M. Masser〉(6:26)
- ザ・クリエイター・ハズ・ア・マスター・プラン****The Creator Has A Master Plan** 〈P. Sanders〉(8:59)

- ウェルカム****Welcome** 〈J. Coltrane〉(11:14)
- ティナ****Tina** 〈P. Sanders〉(6:17)
- イツ・イージー・トゥ・リメンバー****It's Easy To Remember** 〈R. Rodgers〉(4:59)

**ファラオ・サンダース** Pharoah Sanders (tenor sax)
**ウィリアム・ヘンダーソン** William Henderson (piano)
**アイラ・コールマン** Ira Coleman (bass)
**ジョー・ファンスワース** Joe Farnsworth (drums)

録音：2003年4月23日　ワンダー・ステーション、東京
©© 2003 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

\*
  
Produced by Tetsuo Hara .
Recorded at Wonder Station in Tokyo on April 23 , 2003 .
Engineered and Mixed by Shuji Kitamura .
Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara .
Photos : Mary Jane Rosen .
Special Thanks : Blue Note Tokyo .
Designed by Taz .

格をもって、超然とそびえ立っている。かつて“ジョン・コルトレーンの後継者”というレッテルを貼られていた時期のファラオ・サンダースであれば、コルトレーンの音楽を演奏することに、いささかの迷いや戸惑いもあったに違いない。しかし豊かに年輪を重ねて、素直に自身の音楽を歌いあげてゆくことに確信をもてるようになった今だからこそ、あらためてコルトレーン・ナンバーにアプローチをみせることが可能になったのだろう。今回の“ブルーノート東京”でのステージで演奏されたレパートリーは、ほとんどジョン・コルトレーンが演奏していた曲目で占められていた。コルトレーンの音楽をかつてのように演じるのではなく、今日の音楽として独自の解釈で演奏する。そこに現在のファラオ・サンダースの吹っ切れた自信と、明快なスタンスが見える。連日めまぐるしく変わった曲目の中には、ハード・バップ時代にコルトレーンが吹き込んだ<レイジー・バード>のようなオリジナルから、最晩年のコルトレーンのレパートリーまでが、幅広く含まれる。

そんな中であってもうひとつ特筆すべきは、このアルバムのタイトルにもなっている<ザ・クリエイター・ハズ・ア・マスター・プラン>が“ブルーノート東京”のステージでも演奏されたことだろう。ファラオ・サンダースのテナー・サクソによるドラマティックなイントロダクションからスタートするこの曲は、ファラオ自身による神への賛歌ともいうべきもので、これこそが彼がジョン・コルトレーンと共演することによって得た、音楽を演奏することに対する最大の知恵でもあった。それはいまなお、ファラオ・サンダースがプレイをおこなう上において、最大のバックボーンにもなっている。創造主の前で、人間はとても小さいものでしかないが、そのスピリチュアルなメッセージを音楽をつらじて創造してゆくことが、ミュージシャンに課せられた使命なのだということを、コルトレーンは純粋な音楽美をとおし

て表現してみせていた。コルトレーン自身、特定の宗教だけを信奉していたわけではなかったが、彼は神への賛美をとおして、自己の音楽を深く突きつめていったミュージシャンだった。67年の夏にジョン・コルトレーンが世を去ってしまったあと、ファラオ・サンダースもそういったコルトレーンの思想に影響を受けながら、彼自身が進むべき新しい道を模索していった。その結果として生まれたのが、<ザ・クリエイター・ハズ・ア・マスター・プラン>だった。コルトレーンの死後1年半を経て、インパルス・レーベルに吹き込まれたアルバム「カルマ」。その中軸をなしていたのが、33分にもわたって繰り返られる壮大なこの曲である。そこではフルートやホルンをまじえた色彩的なアレンジとともに、ボーカルのレオン・トーマスがフィーチャアされて、ユニークなヴォイスを聴かせてくれていた。言い換えるならば<ザ・クリエイター・ハズ・ア・マスター・プラン>は、ファラオ・サンダースが彼なりのやり方でコルトレーンの音楽を展開させたものであると同時に、ひとりのミュージシャンとしての自身の存在を高らかに歌いあげた、彼にとつての記念碑的な作品なのである。この一作によって、ファラオ・サンダースというミュージシャンの音楽の方向性が決定的な形で示されたのだといっても、けっして言い過ぎではない。そんなモニュメンタルな意味をもっている曲を、あえてとりあげて演奏する。今日という視点で、自分が立っている音楽的なスタンスをあらためて確認するというファラオの考えが、ここにもはっきりと表れている。彼のレギュラー・カルテットによるここでの演奏には、もちろんボーカルなどは加えられていないが、オープニングのフレーズなどはいっそうエモーショナルな肌合いを強めてきているようにも感じられる。演奏時間はオリジナル・バージョンの3分の1にも満たないものの、以前の長さ甚至比べても優るとも劣らないエネルギーの凝縮がみられるプレイである。<ウェルカム>は65年のジョン・コルトレーンのアルバム「クル・セ・ママ」に含まれていた、スピリチュアルな雰囲気をもたえたバラード。“苦勞をとおして何かが理解できたときの気持ち。それは平和な気持ちに通じている。ようこそ、平和な気持ちに・・・”とコルトレーン自身が記したこの曲を、ファラオはオリジナルよりぐっと長いサイズで、メロディーをドラマティックに歌いあげてみせている。ピリー・エクスタインによって書かれた<アイ・ウォント・トゥ・トーク・アバウト・ユー>も、58年のアルバム「ソウルトレーン」以来、コルトレーンがしばしば演奏してきたナンバー。<イツ・イージー・トゥ・リメンバー>も名作「バラード」の中でコルトレーンが素晴らしいプレイを聴かせてくれていた曲で、ファラオ自身も過去に何回かレコーディングしたことがあった。ここでもファラオ・サンダースは、スピリチュアルな雰囲気をいっばいにたたえた、美しいバラード・プレイに終始している。

そういったコルトレーン・ナンバーにはさまって、ここでは<グレイテスト・ラブ・オブ・オール>などの楽しいポップ・ナンバーも演奏されている。ホイットニー・ヒューストンの大ヒット曲を、ファラオはあくまでも彼のベースで朗々と吹き上げている。<ムーン・レイズ>は、黒人ピアニスト、ホレス・シルヴァーのオリジナルで、彼の58年のアルバム「ファーザー・エクスプロエーションズ」の中に含まれていた。ファラオは、オリジナルがもっていた軽快なラテン・ビートを生かして、味のあるプレイを繰り返ろげてみせている。ファラオ・サンダースのオリジナルは3曲。ちょっぴりエキゾチックな味をもっている<ティナ>もさることながら、フリーキーなトーンをまじえて奔放に吹きまくる<東京ブルース>に、やはり彼らしい豪快な個性がよく表れている。